

母と子

チャン・ダン・コア

私たちの前に2人の母子が坐っていた。チャン・ティ・ルーと、タインホア市グエン・ヴァン・チョイ基礎中学校8A学年の生徒のグエン・ザン・ティエンである。この3月¹に、ザン・ティエンは、13歳になったばかりだった。痩せて小さく、青白かった。10歳の子どもにしか見えなかった。しかし、ザン・ティエンは、すでに4冊の分厚い短編集の作者だった。『ザン・ティエンの物語』(1996年)、『家から学校まで』(1997年)、『母さんはおこわを売る』(1997年)、『ザン叔母さん』(1998年)である。ザン・ティエンを読んで、多くの人々は、そのきびきびとした、経験豊かで、鋭い文体と、特にその言葉使いの能力に驚愕した。疑いを表明する者も少なくなかった。それもうなずける。天賦の才能は、常に理解しがたいからである。

「私は無学な人間です」チャン・ティ・ルーは話を始めた。

「私は1946年、クアンズオン県クアンルーで生まれました。私の故郷は大変貧乏でした。クアンズオン県は、タインホア省で一番貧しい県の一つであるといえるでしょう。今ではドイモイ政策のおかげで、タインホアの多くの人は大金持になりました。でもクアンズオンの人は、今でも貧しい食事をしています。ずっと飢えている人も少なくありません。私には7人の兄弟姉妹がいますが、ほとんどが字が読めません。1965年、私は青年突撃隊²に入りました。私の部隊には、教師や学生だった人たちがいました。たくさんの補習学級ができました。それで私は読み書きができるようになりました。1966年6月に労働党に入党したときは、私はまだ字を知らず、申請書と履歴書を人に書いてもらわなければなりません。私の部隊には、150人もの人でしたが、ほとんどがクアンズオンの人でした。私たちはクアンビン省に駐屯しました。私たちの任務は、道を開き、ロンダイの船着場まで道を通すようにすることでした。1966年になって、私は青年突撃隊第104部隊の小隊長になりました。私の小隊は、プンの川底車道を防衛しました。それは、かなり広い溪流の川底を横切る岩場です。敵は昼も夜も爆撃しました。地域全体が真っ白になりました。人々は家を壕の中に移しました。私たちも壕の中にいました。爆撃が止むと、すぐに道路に突進しました。私は女性たちに、彼らが撃ってくればそうさせておきなさい、と言いました。彼らが多量の爆弾に頼るなら、気がすむまで撒き散らさせておきなさい。彼らの落とす爆弾は、当たるとは限らないし、当たっても死ぬとは限りません。人を殺すということは、たやすくできることではありません。爆弾を見たら、顔を地面に伏せて、爆弾の破片がどこを切ろうとしても、切らせておきなさい。でも顔を切らせてはなりません。後で結婚できるように、顔を守らなければなりません。大人の女性も若い娘も、それぞれの顔があるのに、爆弾にやられたら悲惨であり、恐ろしいことです。ところが不思議なことに、私の部隊全体には100人以上の人がいるのに、毎日あんなに爆弾でもうもうとする戦場の真ん中にいて、誰も何事もなかったのです！絶対に欠けることがなかったのです！」

1 [原注]1998年。

2 [訳注 以下同様]「4月の記憶」注11参照。

私は驚いた。

「あなたは冗談を言っていませんか」

「戦争はけっして冗談ではありません。私自身、信じられないほど理不尽だと思います。私たちが戦場に行ったのは、決して短くはなく、満5年もいたのです。私の部隊は、その後さらにチュオンソンの山中深くまで行きました。主な仕事はやはり、道を切り開くことでした。雨季には、かわかした服は煙のにおいがして、いつもとても湿っていました。その爆撃の何年かの間中、女性たちは疱疹と白斑病にかかっただけでした」

「それは本当に不思議です。激しい戦場で、そのように人数の多い部隊の誰も何事もないなんて。この話をしても、信じない人もいるかもしれません」

「私も信じがたいのだから、世間の人には言うまでもないでしょう。実際、その時行った中で、2人は戦死しました。でも2人とも、部隊を離れていたのです。1人目はタンさんで、故郷はクアンソンでしたが、総隊に引き抜かれて、通信兵をしていました。彼は電線を敷設しに行き、奇妙なことに、元の部隊、つまり私たちの部隊の入口のところまでちょうど来たところで、磁性爆弾に引っかかったのです。私たちは彼を収容に行きましたが、髪の一房と腕の半分しか残っていませんでした。2人目は、ウオン・ゴック・マンさんで、とてもハンサムで、歌が上手でした。総隊は彼を引き抜いて、文芸工作に行かせましたが、公演に行く途中で、やはり爆弾で死にました。でも部隊にとどまった人たちは、誰も何ともありませんでした。まるで爆弾が私たちを避けているかのようでした」

「あなたはまた冗談を言っています！」

「冗談なんか言っていません」ルーはほほえんだ。

「この話も、あなたは信じないかもしれません。それは1967年のテト³の時でした。その年、爆撃はとても激烈でした。でもテトには、臨時休戦しました。両側ともそのように公表していました。通常、私たちは一晩中働き、昼間は壕にもぐって眠ります。道路が塞がったり、人が負傷したり、壕が崩れたり、車が燃えたりするような不意のできごとが起こって、女性たちが飛び出していくことを除いては、平穏な日があれば、女性たちはその機会を逃すまいとします。私たちは、ちょうどテトの1日目の朝に仕事に出ました。部隊全員が出てしまい、数人の娘が残ってテトのご馳走を作っていました。そのご馳走はかなり贅沢なものでした。第14兵站所のホアン・チャー所長が、部隊に70キロ近い豚を丸々1頭贈ってくれたのです。アメリカが約束を破ると誰が思ったでしょう。彼らはテトの一日目の正午に、大量に押し寄せて爆弾を投じました。爆弾は道の真ん中に命中しましたが、誰も何事でもありませんでした。でも家では、1個の爆弾が台所に飛びこみ、豚肉の鉄鍋に激突したのです！女性たちは岩の隙間に身を寄せて、難を逃れました。しかし、豚肉の鉄鍋は消えてしまい、豚肉の破片も残っていませんでした。女性たちは惜しがりました。「何ということ！家にご馳走があるので、犬や猫だけを見張っていた。ジョンソンがこっそり入りこみ、豚肉の鍋ごとかっぱらうなんて、誰が思っただろう。本当に悔しい！」

3 旧正月。

そう言って、ルーは笑った。その笑いは、痩せて厳しい顔の上で輝いた。私はまだ驚きを止められなかった。

「あなたには、実際信じがたい話があるのですね！」

「だからこそ、私は覚えているのです。そしてしっかり覚えています。この話もありますよ。それは1968年の中頃で、テト攻勢⁴が終わったばかりのころ、第14兵站所が英雄・競争戦士大会を開きました。私の部隊は、2人だけが参加しました。政治委員のドアン・マンさんは招待客で、私は正式な代表でした。私たちは森を越え、川を渡り、一日中歩いて、暗くなってやっと大会の場所に着きました。それはとても広い石の洞で、千人もの人を収容でき、ホーチミンルートの14番目の道標のところの山の洞窟にありました。行く前に私は女性たちに、「あなたたちはがんばって私の仕事を受け持ってくださいね。私はご馳走を食べに行くけれど、帰ってきたら、とにかく分け前をあげますから。あなた方の分け前をとっておきますから」と言いました。大会は本当に楽しくて、何もなくてよく、発表するだけで、その後は歌い、拍手し、モントゥックやタウバイといった山菜や野生の筍で宴会をして食べるのです。夜寝るときは、足を洗うようにと、兵士が川から水を担いできてくれました。本当に皇帝や女王と変わりありません。組織委員会が私に賞品を受け取るように呼んだとき、私はとても恥ずかしくて、マンさんが代わりに受け取らなければなりません。かなり大きな包みでした。私は開けないで、しっかり抱えて帰りました。今度は全部隊が楽しい時を過ごすだろうと思いました。でも開けてみると、数メートルの混紡の布と、手書きの賞状と、4本のゴムサンダルの紐しかありませんでした。おやまあ！私たちは涙が溢れるほど喜びました。私は女性たちに分けました。「誰がもらっても、喜んであげて、もらわない者も、ねたんだり、疑問を持ったりしないようにしましょう。さもなければ後悔するでしょう。私たちは今は生きているが、明日は死ぬかもしれないのですから」でも誰も死にませんでした。あなたは可笑しいと思いますか」

可笑しなことなど何もなかった。しかし、この勇敢な女性にとっては、すべての危険なことは、過ぎてしまふと、可笑しな話になるのだった。私は好奇心から尋ねた。

「あなたは何年に復員しましたか」

「一時休戦になったときです。1970年に私はティンホア省青年団に移りました。組織は私が学校に行けるようにしてくれました。でも私は勉強できなかったのですよ。とても頭が痛くなったのです。爆弾は私を避けたいけれど、字も私を避けるのです。省の青年団に数年いてから、私はティンホア食糧倉庫に移りました。1990年に私は退職しました。夫も退職していました。あの人も以前は青年突撃隊でした。私たちは戦場で出会い、愛しあったのです。今彼は弱っていて、もう何年も腸の病気で、野菜しか食べず、蛋白質を食べることができません。たびたび、特に天気が悪くなると、寝台で寝たきりになります。でも私たちはとても幸福に暮らしています。私と夫の退職金は、全部合わせて40万ドンになりました。家には5人います。夫婦2人と娘2人、それに今年83歳の私の父です。退職金をもらったとき、私は20万ドンを娘2人がもっと勉強できるようにと取っておきました。5万ドンを電気料金に、15万ドンを米を買うのに当てました。さらに家のすべての費用については、私の蒸し器にかかっています。毎日私はおこわを売りに出て、娘たちの

4 1968年の旧正月に、南ベトナムの解放勢力と北ベトナムからの人民軍勢力が、南部各都市や米軍施設に一斉にしかけた総攻撃。その後の和平交渉や米軍撤退を引き出したが、解放勢力の損害も甚大であった。

学費にし、家族全部を養います。娘たちに、父母は無学だから、あなたたちは一生懸命勉強しなければならぬ、本当によく勉強しなければならないのだと言っています。幸い、娘たちは2人とも、勉強がとてもよくできます。上の娘のホアイ・トゥーは、ラムソン特別学校の12学年です。最近、全省のフランス語の上手な生徒テストで、2等を取りました。今は選抜隊にいて、国家の上手な生徒テストを受ける準備をしています。ザン・ティエンも、省で文才のある生徒の1人です」

「あなたはザン・ティエンの小説を読みますか」

ルーは首を振った。

「私は目が回るほど忙しく、本を読む時間などありません。娘が熱心に書き、書いては消し、紙を浪費するのを見て、黒板2つとチョーク1箱を苦労して買ってやりました。娘が一日中でも、一年中でも書けるように」

「君は黒板の上に文を書くの」

私は驚いて、ザン・ティエンの方を向いた。子どもははにかんで笑い、部屋の端から端までを占めている、2つ並んだ黒板を指差した。

「はい。あれが私の原稿です。気に入らないところは、消して書き直します。字が2つの黒板にぎっしり詰まると、物語を終わらせませぬ……」

私は笑い出した。おそらくこの世で、ザン・ティエンのように文章を書く作家はいないだろう。チョークで黒板に書く。原稿を直すのも黒板の上である。それなのに完璧である。文章や言葉は明快でわかりやすい。私は尋ねた。

「君はひとつの話を長い間書くの」

「場合によります。ある短編は、半月で書きました。たとえば「母さんはおこわを売る」の物語は、私の母について書きました。青年突撃隊のころからの母の話もです。速く書いた物語もあります。姉のトゥーの自転車について書いた「おんぼろ自転車」のようなものです。あるいは、「ザン叔母さん」「サック伯父さん」のような話も、とても速く書きました。サック伯父さんは、私の実の伯父さんですが、酒飲みで、気難しい人でした。私が物語を書き終えて、伯父さんに読んで聞かせる前に、死んでしまいました。私が書く人物は、すべて本当にいる人たちです。私は作り話はしません。毎日、私の人物は、黒板の前に立って、自分自身についての話を読むことができるので、正しくないところは、私に直すよう意見します。とても怒って、すぐに消してしまった人もいました。そうすると物語はなくなってしまいます」

そんなこともあるのだろうか。おそらく、子ども作家ザン・ティエンほど、自分の人物と近い作家はいないだろう。人物は反乱を起こし、作家に反対し、作品を破壊することもできる。私は尋ねてみた。

「君はたくさん読書するの。どの作家が一番好きなの」

「以前は私はあまり読みませんでした。本がなかったからです。本はとても高いからです。母は買えませんでした。最近、私の短編集『家から学校まで』がキムドン出版社で印刷されたとき、私はハノイまで行って、本を受け取り、原稿料をもらいましたが、出版社の人たちがリュック一杯の本をくれました。私は家に持って帰って、一晩中読みました。どの物語もおもしろいと思いました」

ルーは笑った。

「去年、タインホア教育局局長のレ・ディン・ヒン先生が、娘に「若い才能基金」の賞金をくれました。ホーチミン市のホアンカウ外国語学校も、娘に毎年1人当たり100ドルの奨学金をくれます。私は娘が本を買うのに使わせてしまいました。来年のことは、予定を立ててあります。ホアイ・トゥーが大学に受かったら、父を故郷に帰して、叔母に面倒を見てもらいます。夫はタインホアにいて、ザン・ティエンを育てます。私はトゥーについてハノイに行きます。朝はおこわを売りに行き、夕方は野菜を売り、金を稼いでトゥーが大学で勉強できるようにします。娘たちは大学を卒業しなければなりません。もしかしたら、今後大学を出ても、失業するかもしれない、私のようにおこわを売るだけかもしれません。でもおこわを売る人も、大学の水準のあるおこわ売りでなければなりません。以前、アメリカの爆弾も私を殺すことはできませんでした。今、全国が平和になったのに、貧乏や苦勞が私に毒を飲ませるように、じわじわと殺すようなことがあっていいのでしょうか。そんなことは一番信じられません。それは理不尽なことだからです。この上なく理不尽だからです……」

【片山須美子 訳】